

真似し、発音の要領が少し分かったら、恥ずかしがらずに自分で発音をして先生や先輩に聞いてもらい、直してもらうことが外国語を勉強する近道である。(私の学生時代、テープレコーターは、高嶺の花であった。外国語大学は恵まれたほうで、各クラスに音質のあまり良くないテープレコーターが一台置かれ、学生たちは毎日それを囲んで授業用のテープを聞いていた。今は中国の学生にしても、日本の学生にしても、テープレコーターはもちろんのこと、いろいろな録音教材がたくさんあり、本当に幸せである。)

「聞く」と「話す」練習をすることは学生の語学センスをみがくの一番重要である。聞くことは話すことの基礎であり、よく聞いてこそ、初めてよく話せる。聞くことはただ大脳の聴覚を機械的に刺激するだけではなく、耳で音を聞くことを通して、話された内容に対する理解、記憶、分析、判断など脳を働かせることが含まれている。聞き取る速度および正確さには人の理解力と知識の広さが反映される。だから、私は外国語を教育するにしろ、勉強するにしろ、「聞くこと」と「話すこと」から、着手すべきであると思う。

私は大学時代に毎朝録音テープを2回ほど聞きながら、大きな声でその発音の真似をし、新しい単語と本文を覚え、それから通常の講義に出て、夕食後、授業の内容を復習してから、クラスメートと日本語で会話の練習をした。相手のミスに気が付いたら、お互いに直しあう。このようにして会話を進めていく。塵も積もれば山となる。こうしたことが私の外国語の学習法であり、みなさんのご参考になれば幸いである。



より良い外国語の授業をめざして

経営学部

島田 了

学生の皆さんはもうご存知でしょうか、愛知大学は2001年度から「FD活動」を全学で始めています。「FD活動」とは、「大学の学部教員の教育および研究を開発・発展させるための活動」ですが、なかでももっとも重要と思われるものが、学生にとっていかに魅力的なそして役に立つ講義をするかということです。

それと平行して名古屋語学教育研究室でも、外国語を担当する教員の間で情報の交換をおこない、よりよい語学の授業を目指していくことになりました。その第1回目の集まりが6月22日にあり、そこで活発な意見の交換がおこなわれましたので、その結果を簡単に報告したいと思います。

やはりほとんどの教員が指摘したのは1クラスの人数の問題でした。法学部・経営学部対象の大人数の授業では個人個人の指導がなかなか出来ない、学生との距離が縮まらないといった声が圧倒的でした。クラスの人数は、現在準備中の新しいカリキュラムの導入などにより改善を図るよう努力していますが、現在の条件のもとですぐにできる有効な方法として、座席を指定することによって学生一人一人の名前を把握するようにする、また必ず一人一回はあてるなど、授業に参加しているという自覚が持てるように指名の方法を工夫している等の報告がありました。

学生の声小さいので発音の指導が難しいという悩みに対して、グループ学習をさせて、クラスの他の学生との人間関係を作らせることによって対応しているという報告もありました。その他各

人さまざまな工夫をされている様子がうかがうことができました。せっかくのこうした工夫が一人のものに終わらないように、互いに成果を利用しあえるように、情報の交換の大切さを確認して、今後もこのような研究会を継続していくことになっています。

またすでに学部性格上小人数クラスでの授業を実現している現代中国学部の教員から、環境が整備されていても、学生の自発的な勉強意欲に直接結びつくものではない、内容に関する工夫がより問題なのだという指摘がありました。

その他留学生向けの日本語を担当する先生からは、留学生と日本人学生との交流の機会が少ないのはとても残念だという指摘もありました。

外国語担当教員は、少しでもよい授業が出来ればと努力しています。そのためには教員の努力はもちろんのこと、学生の皆さんの意見を少しでも多く聞かせてほしいと思っています。意見や要望のある学生は、中央教室棟3階の語学教育研究室を訪ねてくださるか、あるいは授業の終わったときなど担当の先生に気軽に声をかけて、授業に関して何でも気の付いた事を話してください。今後の授業に役立てたいと思います。

Town と City

経営学部
安藤 聡

英語の 'town' と 'city' の違いは何か。多くの人は 'town' が「普通の町」で 'city' が「大都市」と考えるであろう。結果的にこれではほぼ正解である。前者に「町」、後者に「街」という漢字を当て

はめて考える人も多い。「町」の原義は「田圃の中の畦道」だからこの字は何となく牧歌的な地方都市の風景を連想させるし、「街」は元来「道が交わる場所」すなわち「十字路」を意味していて、そうすると主要道路が交わる場所には必ず主要都市があることからわかるように、「街」が意味するのはそれなりに大きな都市なのである。

しかしながら「犬」と 'dog' が必ずしも等号で結ばれるとは限らないように、'town' と「町」、'city' と「街」が完全に対応するというわけでもない。話は逸れるがなぜ「犬」と 'dog' が同じでないのかと言えば、「犬」という漢字から普通の日本人は、あるいは少なくとも私は、柴犬、秋田犬、もしくは雑種の和犬を思い浮かべる。一方で 'dog' という英語が通常英語圏の人の心に喚起するものはまずこれらの種類の「犬」ではない。因みに私は 'dog' というときまずボーダーコリーをイメージする。

そのようなわけで、'town' と「町」、'city' と「街」もまたそれくらい異なる場合があるのだ。詳しく知りたければ辞書を「読む」のがよい。『ジーニアス英和辞典（第二版）』（大修館）によれば 'town' は「1. 町 (villageより大きくcityより小さい)。2. [通例the~] (田舎に対して) 都会、町なか。3. [通例無冠詞で] (地域の中心となっている) 都市。4. [the~; 集合的に; 単数・複数扱い] 町民、市民; 大学町の住民。5. ((米)) 郊区。6. ((英)) 定期的に市 (いち) が開かれる所。7. ペンギン [プレーリードッグ] の巣が多い所。」である (例文、補足説明は省略したが、本当はこういうところも読むとよい)。なぜペンギンとプレーリードッグなのかは大いに気になるところだが、それはともかく1.の定義にも関わらず 'town' が意外にも「街」のニュアンスを含んでいることがわかった。そういえばポール・マッカートニーの曲に「ロンドン・タウン」というのがある。

一方 'city' はといえば、同じく『ジーニアス』によれば「1. (田舎に対して) 都市、都会。2. (行政上の正式の) 市 ((米国では州の認可を受けた自治体で county の中の一単位。通例 town より大き